

第 11 号

発行日 平成23年2月28日
 発行者 〒036-8561 弘前市文京町3
 理工学部同樹会(理工学部内)
 題字 同樹会長 千葉 信行
 印刷所 株 笹 軽 印 刷

理工学部同樹会報

会員寄稿

よく遊び、よく遊び： その頃の生物学科と私



佐藤 矩行
 (昭和四十四年
 理学部生物学科卒業)

思いがけず、この二月二日に「弘前大学名誉博士号」を授与された。弘前大学理学部を卒業して四十余年、ホヤを使った動物の発生と進化に関する研究業績が評価されてのことであるが、愛する母校の名誉博士であり、その光栄は言葉では言い表せない。遠藤正彦学長、鈴木裕之農学生命科学部長、石黒先生などを初めとしてお骨折りをいただいた方々に改めて感謝を申し述べたい。かなりプレッシャーのある博士号であるが、できるだけ早く心の中にしまひ込み、この名誉をあまり気にすることなく、さらに研究に邁進したい。

この機に自分の弘前大学時代を振り返ってみると、古き良き時代に本当に楽しく学部の四年間を過ごせたと思う。私は昭和四十年入学の理学部生物学科一期生である(しばらくして理学部生物学科の名前はなくなったが、農学部と連合して農学生命科学部として新しい道を歩みだしてもう久しい)。昭和四十年に弘大文学部が人文学部と理学部に改組されることになったの

だが、改組のための国の予算処置が遅れ、入学試験は三月末に行われた(と記憶する)。その頃の大学受験は一期校、二期校の制度のもとで行われていたので、私達は三期校の入学選抜試験合格者になる。私は新潟で生まれ育ち、津軽とはそれまで何の縁もなかった。入試は弘前実業高校で行われた。試験が終了して会場の教室から廊下に出てまだ雪をかぶった岩木山を見た時、初めて、大学に合格するという実感をもったことを昨日のように覚えている。紙面の都合上詳しくは書けないが、弘前と私の出会いは運命的なものである。

生物学科一期生はわずか十人で、男子六名に女子四名。文理学部から留年してきた学生が三名いたものの、実にちようど良い人数であったと思う。この中で八名は卒業後も年に一度夏にクラス会を開いて集まっており(朋友の藤原を亡くしたのは本当に残念であるが)、今でも名字でなく名前と呼び合い、何でも言い合える気さくな仲間である。その頃の生物学科には、動物の

系統進化を研究する講座、動物の生理発生を研究する講座、植物の分類生理を研究する講座の三つがあった。それぞれに教授、助教、助手の三名の教員がおられたので、早い話、卒論はマンツーマンに近い形で指導が可能であった。また、理学部生物学科になったこともあり、どこことなく皆希望にもえていたように思う。今弘大農学生命科学部の生物学関連のカリキュラムがどうなっているかは分からないが、私達の頃は月曜日から土曜日までほとんど隙間のないほど授業がびっしり組まれており、それがほぼ全て必修に近かったと思う。かくて単位を落とせばほぼ間違いなく留年になることもあって、知らないうちに否応なく勉強はさせられたのだと思う。それでものんびり屋の私は皆によく助けてもらった。植物分類学実習ではある決まった数の標本を提出しなければならなかったが、私は全く数が足りず、女の子が全員で私の分をおぎなってくれたことも思い出である。

もう今さらそんなことはないにしても、私は自分にとつての「天職」とは何かということに随分悩んだ。生物学研究がそれだとは今でも余り思っていない。三年生の時に深浦に臨海実験所ができ、そこで初めての臨海実習があった。実によく遊び楽しかった。で、四年生になる前に卒論のために各人所属する研究室を選べという段階で、私も含

め男子四人が深浦で卒論をやるうということになった。しかし、誰が研究の面倒をみるのだと、千葉滋男先生にきつく注意され、結局私と津曲は、「昆虫の染色体をもとにした系統進化の研究」をしていた斎藤和夫研究室を希望して許可された。斎藤研にはすでに小宮さんと加納さんが所属を決めていたので、斎藤研は四人の卒論生の面倒をみることにになった。理学部の四階の南西角の階段脇の部屋一つだけであった。

斎藤先生はアメリカ留学から帰られて間もなくであったこともあって、ジーンズ姿で、全てがリベラルであった。研究室で奥さんお手製のクッキーをいただきますながらお茶を飲むことがよくあった(また家の方にも何度もお招待いただいた)。その時はいつも皆で昆虫の研究の話になるのだが、私はそれまで昆虫というものに全く興味がなく、何も知らないのでもいつも黙っていると、「佐藤君も何か言ったら」とお声がかかる。卒論で私はシヨウリョウバツタのB染色体の集団遺伝学のような研究をしたのだが、カルノアという酢酸の臭いの強烈な固定液を使い、いつも斎藤さんを困らせた。仕事(研究)は面白かった。で、時々遅くまで研究室に残ったり、あるいは土曜日に仕事をしていると、先生から「佐藤君もう帰ったら」と何度も言われた。自分が大学の教員になって研究室

を

を院生とシェアしてみると、一人にしてくれないかというこの言葉の意味を良く分かるようになった。当時斉藤研には阿部さんと工藤さんという現役の高校の先生がよく顔を出して仕事をしていた。二人にはいろいろ怒られもしたが、またとない経験をいくつかした。

私は高校生の時から北大に憧れていた。斉藤さんは動物の染色体研究の大家である北大の牧野佐二郎さんのお弟子で、斉藤研の優秀な先輩達の何人かは北大の大学院に進んで行った。夏が来て大学院進学のことを考え出し、私もそうしたいと斉藤さんに相談したら、「君の成績では北大は無理だから新潟大にしなさい。私の先輩がいるから」ということで、新潟大の大学院を受け合格した。すると斉藤さん曰く、「私の先輩より本当によく仕事をするI先生が新潟大にいたので、紹介状を書くからそこに行きなさい」。かくて、人情豊かで文化の香り高い弘前という土地で四年間よく遊びよく遊び十分に体力をつけた若者は、新しい道を踏み出していく。

その後、新潟大(修士)―東大(博士)―京大(助手)と進む私の研究者としての人生は結構波瀾万丈で、もう一回同じことをやれと言われても無理である。そして、その原点が弘前大学にある。今の自分を思うと、そこで交わることでできた人達に心から感謝したい。

定年退職教員

平成二十二年度末をもって、数理科学科 倉坪茂彦教授、数理科学科 二ツ矢昌夫准教授、電子情報工学科 小西榮一准教授の三名の先生方がご退職されます。ご退職の先生方におかれましては、永年にわたる教育研究活動、及び同樹会に対するご尽力に対し厚く御礼を申し上げますとともに、今後益々のご活躍と同樹会への変わらぬご支援を宜しくお願い申し上げます。なお、各先生方から本学部における様々な思い出や出来事に纏わるお言葉を頂戴しました。在学時代にお世話になった先生のお顔、お言葉に、当時を懐かしみながらお読み頂ければ幸いです。

教師冥利

理工学研究科 (数理科学科)
倉坪 茂彦



理学部数学科と理工学部数理システム科学科および数理科学科の教員として四十一年間勤務

しました。お付き合い頂いた学生諸君は千二百人を上回ります。奇遇ともいえるべきか親子二代にわたって「実解析学」(私の主な担当科目)を聞いてもらったケースもありました。一組は、母親と息子でしたが、結婚して姓が変わっていたためそれに気がついたのはその学生が四年生になったときでした。ある事情から責任者を務めた国際シンポジウムの打ち上げのとき、「僕の母も数学科の卒業生です」

そして旧姓を聞いた途端に三十年前の卒業生を思い出しました。二〇〇二年のことです。もう一組は、父と娘でした。「小さいころ父から数学を教わった」という言葉とその名字を結びあわせると、数年前に四十代で亡くなった卒業生が頭に浮かびました。演習の時間にそれとなく聞いて見るとやはり忘れ形見でした。二〇〇七年のことです。またあるとき他学科の新生が「父と母から先生に挨拶するように言いつかりました」と来室したことがありました。出身地と名前を聞いただけで数学科を同時に卒業した両親の名前を思い出しました。二〇〇〇年のことです。この三例の親御さんはいずれも着任して五年くらいの卒業生でした。こういう教師冥利に尽きる体験には少なくとも三十数年の時間が必要のようです。

平成の初め頃までは、ポスターの出る夏休み前とか卒業式の

前ころ学生を家に呼んでお酒を一緒に飲むことが、楽しみの一つでした。二十才を過ぎた学生を相手にする大学教員の特権でもありました。これらの卒業生の多くとは、その後もとぎれることなく年賀状のやりとりが続いています。

入試制度はこの間大きく変わりました。くわえて少子化などの社会情勢の変化もあり北海道地区から受験生の減少した時期がありました(その後少し復調しましたが)。この事態に危機感をいだき、教員が手分けして北海道の高校を訪問したことがあります。私の担当は、帯広地区、旭川地区などでした。「北海道教職員録」を頼りにそれらの地区で教員をやっている卒業生を探し出して学科の同窓会を開いてもらい、三箇所で二十数名の卒業生が集まってくれました。本当にうまい酒でした。そしてそれぞれが立派に活躍している様子が何え、これまた教師冥利に尽きる一瞬でした。

最後に永きにわたって同樹会を支援していただいた卒業生の皆さまにお礼を申し上げますとともに、新しく入学される学生やご家族の皆様の幸多からんことをお祈り申し上げます。



今が卒業か？

理工学研究科 (数理科学科)
二ツ矢 昌夫



私は、文理学部理学科の最後の入学生です。勉強以外のやること多く、四年生になっても、理学部の二、三年生の数学の授業を受けていました。ようやく卒業できて、すぐに理学部数学科の助手になりました。学力、専門知識も乏しいのに助手になったからたいへんです。助手になってから二、三年間は、理学部三、四年の講義に出席しました。また、今は亡き権平先生のセミナーに参加して、理学部一、二期生とともに勉強しました。いっしょに授業を受けていた人の中には、最初、私のことをやっぱりドツペッタ(落第)と思っただ人もいたようです。理学部初期の卒業生とは、その後も、学友のような感じで接しています。

一九八八年理学部に新設された情報科学科に所属しました。そして、一九九七年には、理学部が理工学部となり、数理システム科学科そして数理科学科に所属しました。いずれの学科のときも、学生とのセミナーなど

でのデータ解析的な勉強は、私の専門知識を豊かにしてくれました。感謝しています。また、テニス、スキーなどいっしょに楽しく遊んだことも強く印象に残っています。私にとって、今が、定年退職ではなく、卒業かもしれません。

卒業後のことを少し書きま

す。統計などの分野で、最近、データマイニングとかテキストマイニングという本を目にします。マイニングの意味は、宝石を掘り当てるという意味のようです。大量のデータという鉱山から宝石を探すのが目的です。今年の数理科学科の卒業生には、二年のときの計算数学序論IIで、データマイニングのまねごとを少し行いました。インターネットは、データをあちこちから容易に得ることを可能にしています。これからは、ネットサーフィン、そして、データマイニングをと思っています。職場などにも面白いデータがたくさんあると思います。皆さんもマイニングいかがですか。

自分の勉強を

見つけよう

理工学研究科
(電子情報工学科)
小西 榮 一

「最近の学生は…」などと言うと、また年寄りの繰言と思

かも知れない。現在電子情報工学科で教えている在学生と一九八八年度情報科学科が出来た当時の学生とを比較してみたい。結論から先に言うと、現在の学生は、どこか受身であり、ひ弱であると思える。現在では施設もカリキュラムも整っており、教員は教育的なノウハウを身に付けている(はずです)。ところが、弘前大学理学部(当時)に情報科学科が出来たとき、私は学科設置の最初から学科教官(当時)として、教育・研究に携わったわけであるが、情報系の学科としての施設は不十分だし、カリキュラムも整備していたとはとても言えなかった。しかし、私の記憶に残る何人かの学生はたくましく、逆境を跳ね返すように当学科(および大学院修士課程)を巣立って行った。またこれは内緒の話であるが、当時の情報科学科の教官の間では学科の教育的・研究的方針を巡って騒動があった。だが、それらの学生が無事に卒業したことにより、教官が学科経営に自信を持てるようになったと記憶している。つまり教員が学生に「育てられた」面があったと考えられる。年寄りの妄言として言うならば「現在の大学生は高校生に毛の生えたようなものであり、頼りない。昔のたくましい本場の大学生が懐かしい。」

つまらない繰言をのべてしまった。ご容赦いただきたい。

理工学部と

理工学研究科の

就職状況

理工学部就職対策委員長
有賀 義明

就職氷河期の中で最も就職率が低かった二〇〇七年度の後、就職状況は二〇〇七年度までは緩やかに好転していましたが、二〇〇八年九月のリーマンショック(米国リーマン・ブラザーズの破綻)を契機に、それまでの傾向が反転し、就職環境はともて厳しいものになりつつあります。

こうした中、本学全体の就職率は、二〇〇七年度九〇・八%、二〇〇八年度九一・一%、二〇〇九年度八五・八%となつていきます。二〇〇九年度の八五・八%の値は、全国二百三十大学(卒業生数一千人以上)の就職率ランキングで二十二位にランクされています。(出典:ニサンデー毎日二〇一〇年七月二十五日号)

大学院博士前期課程への進学率は、二〇〇五年度四〇・五%、二〇〇六年度三五・一%、二〇〇七年度三〇・三%、二〇〇八年度三八・二%、二〇〇九年度四七・五%と推移しています。就職環境と大学院進学率との相関性については、就職環境が良好な場合には、早めに就職しようとする学生が増えるため進学率が低くなり、就職環境が悪化

した場合は、就職が思うように行かないことを反映して進学率が高くなる傾向があります。理工学部の就職率は、二〇〇五年度九六・四%、二〇〇六年度九六・五%、二〇〇七年度九七・四%、二〇〇八年度九八・六%、二〇〇九年度九五・九%と推移しています。大学院博士前期課程の就職率は、二〇〇五年度一〇〇%、二〇〇六年度一〇〇%、二〇〇七年度一〇〇%、二〇〇八年度九八・三%、二〇〇九年度九七・〇%と推移しています。理工学部、理工学研究科ともに高い水準にありますが、最近の就職環境の悪化を反映して少し低下傾向にあります。

二〇〇九年度の場合、理工学部卒業生(二〇一〇年三月卒業)の就職先は、建設業、製造業、電気・ガス・熱供給・水道業、情報通信業、運輸・郵便業、卸・小売業、金融・保険業、教員、公務員等でした。また、大学院博士前期課程修了生の就職先は、建設業、製造業、電気・ガス・熱供給・水道業、情報通信業、運輸・郵便業、金融・保険業、教員、公務員等でした。就職先の比率は、年度によって変化しますが、学部の卒業生に関しては、製造業、情報通信業、教員、公務員の比率が比較的高く、博士前期課程修了生に関しては、製造業に就職する学生の比率が高いです。

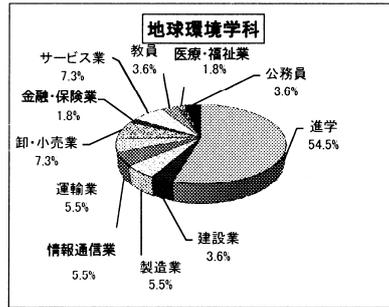
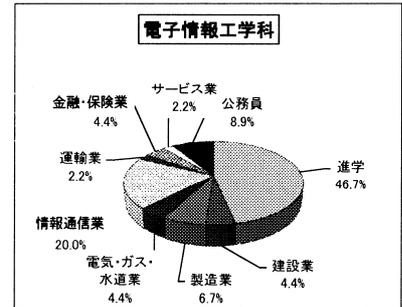
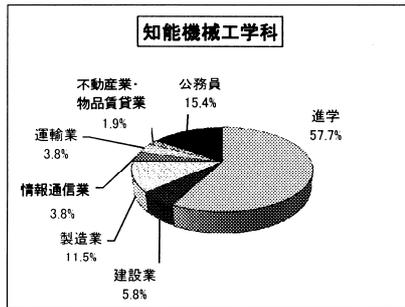
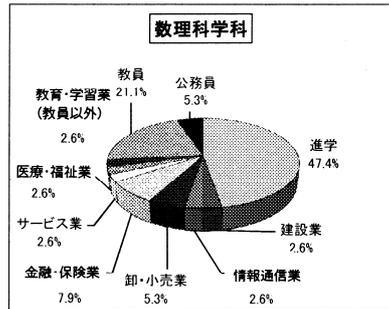
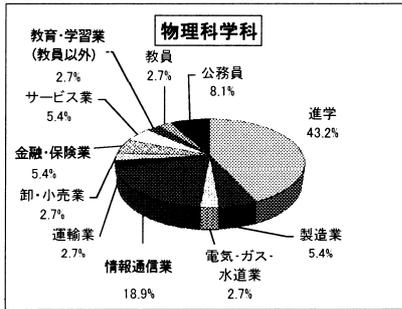
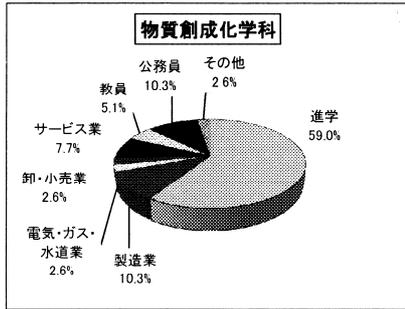
出身地域と就職地域については、二〇〇九年度の学部卒業生の場合、青森県出身四六・八%、北海道出身二九・五%、東京・関東出身四・三%に対して、就

職地域は、青森県三〇・九%、北海道九・四%、東京・関東三四・六%でした。博士前期課程修了生では、青森県出身三九・一%、北海道出身三二・八%、東京・関東出身四・七%に対して、就職地域は、青森県一二・五%、北海道三・一%、東京・関東五六・二%でした。学部卒業生の場合は出身地域の地元就職する傾向が強く、博士前期課程修了生では首都圏に就職する比率が高くなります。

二〇一〇年度の就職環境は、二〇〇九年度よりも更に厳しい状況になっており、超氷河期と呼ばれるようになりつつあります。最近の就職事情として、複数の内定を獲得する学生と一つも内定を取れない学生に分かれています。就職活動では、コミュニケーション能力、人柄、仕事に対する熱意などの重要性がよく指摘されますが、内定を獲得するためには、なぜその企業でなければダメなのか、その企業に入って何をしたいのか、将来どのような仕事をしたいのか、将来の夢は何なのか、こうした事項について、自分自身の考えを自分自身の言葉で臆せず熱心に語れるかどうか重要なファクターになります。

これから就職活動に臨む学生は、自分で考え、自分の考えを持ち、何をやりたいのか、なぜやりたいのか等について自分の言葉で熱く語れるように、主体的に自律的に日々の自己研鑽を積み重ねておくことが求められます。

平成二十一年度
理工学部就職状況分野別グラフ



進学先一覧

(理工学部卒業生)

数理科学科

弘前大学大学院 一四名
その他、北海道大学大学院、
東北大学大学院

物理科学科

弘前大学大学院 一五名
その他、東北大学大学院

物質創成化学科

弘前大学大学院 二三名

地球環境学科

弘前大学大学院 十五名
その他、北海道大学大学院、
東北大学大学院、茨城大学
大学院、筑波大学大学院、
東京工業大学大学院、明治
大学大学院、名古屋大学大
学院

電子情報工学科

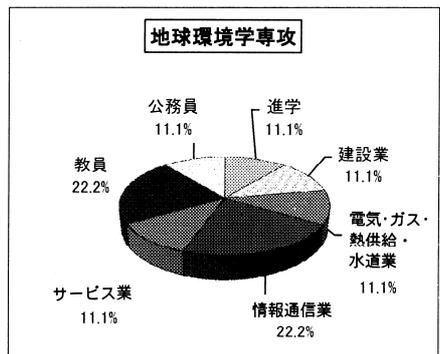
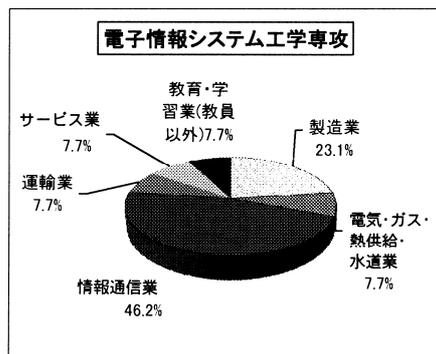
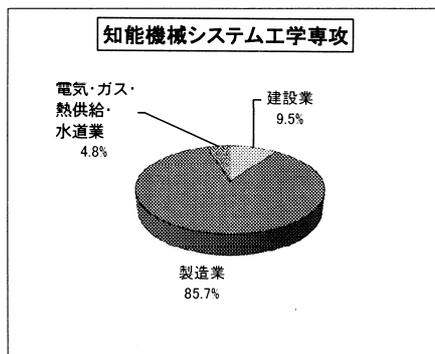
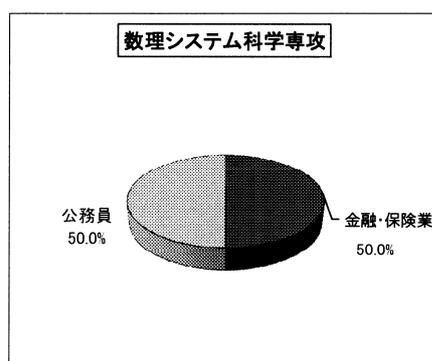
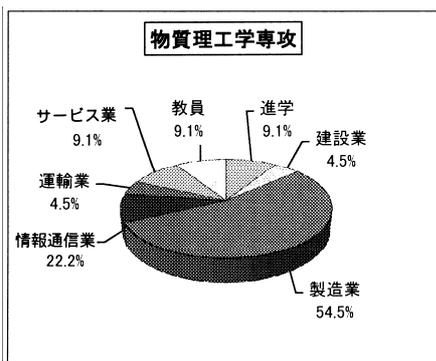
弘前大学大学院 二二名

知能機械工学科

弘前大学大学院 三〇名

平成二十一年度

理工学研究科
就職状況
分野別グラフ



紙上企業訪問 (3)

環境保全の
分析業務に携わって

(株) 環境工学

乗田 聖子

(昭和五十六年
理学部化学科卒業)

同樹会報第十一号の発行に際しお慶びを申し上げます。

私は、理学部化学科の卒業で、有機化学研究室に所属して渋谷毅先生にご指導いただきました。現在は、弘前市内の株式会社環境工学に勤務しています。

当社は、同樹会員でもある当社社長の葛西和彦が平成元年に環境アセスメントを主業務とする会社として弘前市に設立し、その後、計量証明事業等の登録、維持管理部門、CDP事業部(機能性素材の研究開発部門で、後ほど詳しく紹介します。)の開設など幅を広げ、現在、弘前市城東中央三丁目において、環境保全分野における調査・分析・各種プラントの設計・維持管理及び研究開発等、広域にわたって事業を行っています。

当社は、約三十名の小さな企業ですが、その内七名の同樹会員がおります。続いて、部門ごとの業務内容や同樹会員の仕事を紹介したいと思います。

「調査部門」
法律や県条例に基づく環境アセスメント調査を始め、公共事業に伴う動植物調査や魚の大量死原因究明調査、近年問題になっている外来生物対策に関する調査などあらゆる環境調査を行っています。ここでは、理工学研究科地球環境学修了の会員が専門知識を生かして業務を行っています。

「分析部門」
大気汚染防止法、水質汚濁防止法、悪臭防止法、土壌汚染対策など各種法令に基づいた有害物質の定量分析や、道路、工場、建設工事等の騒音・振動測定を行っています。この部門には、理学部化学科卒業、理工学部物質理工学科卒業、理工学研究科物質理工学修了の三名の会員がおり、化学分析の専門知識を生かして、pH測定や滴定などの手分析からガスクロマトグラフ質量分析計など各種の機器分析まで、迅速、正確な分析に努めています。私はここで環境計量士として計量証明書の発行や分析機器の管理など計量管理の仕事に携わっています。

「設計部門」
廃棄物最終処分場や汚水処理施設など環境関連の設計や廃棄物処理法に基づく施設の設置許可や業の申請業務などを行っています。

「維持管理部門」
廃棄物最終処分場から発生する浸出水の処理施設や飲料水の原水浄化施設など各種水処理の維持管理を行っています。

「CDP事業部」
CDP事業部では、食品、医薬など様々な分野で活用されているシクロデキストリン(CD)をポリマー化したシクロデキストリンポリマー(CDP)という機能性素材の製造販売及び用途開発研究を行っています。CDは環状オリゴ糖とも呼ばれ、グルコースが環状に結合したドーナツ形状(空孔が5、6、7、8、9、10程度)の分子構造を持ち、空孔の内側が疎水性で外側が親水性であるため、水分の存在下で空孔内にサイズの合った有機化合物を取り込んで包接化合物を形成する特徴があります。この特徴を利用して、例えば霧吹きタイプの消臭剤(悪臭成分の包接)、高濃度カテキン飲料(カテキンの苦味・渋味のマスキング)などに応用利用されています。

CDは水溶性ですが、CDPはCDの特徴を持ちつつ水不溶性となった素材で、排水中の有害物質の除去剤及び果汁などの食品中からの有効成分の分離抽出剤としての活用が期待されます。現在、理学部化学科卒業、理学研究科化学修了の二名を中心として、大学や企業との共同



研究等によりCDPを活用した製品・技術の開発を目指しております。

また、各部門の業務を行う上で、国家資格等の資格を有することが必須です。当社の同樹会員は、技術士、環境計量士、臭気判定士、作業環境測定士、公害防止管理者、ビオトープ計画管理士など多くの資格を取得しています。これが、会社の技術力向上にもつながっています。

「豊かな地球の未来を守る」をテーマに掲げ、環境保全に貢献できるよう日々仕事に取り組んでおります。当社の仕事に少しでも興味をもたれた方は、気軽にお越しください。

最後になりますが、同樹会の益々のご発展と会員の皆様のご健勝を祈念いたしまして筆を終えさせていただきます。



弘前大学創立
六十周年記念会館
コラボ弘大

コラボ弘大とは、弘前大学全学にまたがる産学官連携及び、社会貢献に関わる機能を集中化し、学内外の利便性を高めることを目的に、弘前大学創立六十周年記念事業の一環として、理工学部(旧理学部)と農学生命科学部(旧農学部)の間に建設された八階建ての複合ビルです。

このビルには、弘前大学の産学官連携の核となる地域共同研究センター、研究用大型機器を整備し、県内企業等に開放している機器分析センター、研究・開発活動を支援するためのレンタルラボ、セミナーやシンポジウム等の開催に適した八甲田ホール等の施設が備わっています。

会員各位のそれぞれにお立場において、事業のさらなる推進、新規事業の展開、大学との連携による研究等に関しての相談や実施の際には、是非お気軽にご利用ください。

平成二十一年度 理工学部卒業・理工学研究科修了 祝賀会

去る平成二十二年三月二十四日、例年通り大学会館三階大広間にて、理工学部卒業・理工学研究科修了祝賀会が開催されました。卒業・修了を迎える学生諸君にとって、本会が縦（先輩、後輩）及び横（同期の仲間）の繋がりを意識できる場となるよう、努力を続け、自然に参加者が集う会になることを願うばかりです。しかしながら、ご退職の先生、各学科長の先生方からのお言葉、卒業・修了生のユーモア溢れる沢山のスピーチ、この度卒業を迎えるメンバーを加えた弘前大学津軽三味線サークルの演奏披露などがあり、大変な盛会となりました。最後になりましたが、祝賀会準備及び開催にご協力頂いた理工学部教職員関係各位に感謝申し上げる次第です。



物理科学科



数理科学科



地球環境学科



物質創成化学科



知能機械工学科



電子情報工学科

平成21年度 弘前大学理工学部同樹会決算書

平成22年3月31日

◎収入の部

(円)

項 目	金 額	摘 要
前年度繰越金	7,823,572	
会 費	1,213,000	正会員 121人 学部 1年 (22年度入学) 61人 610,000円 " 1年 (21年度入学) 29人 290,000円 " 2年 1人 10,000円 " 3年 2人 20,000円 " 4年 (祝賀会時納入4人分含む) 24人 240,000円 院生 1年 3人 30,000円 " 2年 1人 10,000円 " 後期課程 0人 0円 協賛金 1人 3,000円
卒業・修了祝賀会 当日会費納入分	178,000	学生 40人 100,000 教員等 31人 78,000
預 金 利 息	126	
計	9,214,698	

◎支出の部

(円)

項 目	金 額	摘 要
弘前大学同窓会費	240,000	9月14日払込み
同樹会報作成費	252,000	会報第10号 1,500部
卒業・修了祝賀会費	362,020	卒業・修了祝賀会経費 (184,020円) 卒業・修了祝賀会当日会費 (178,000円)
写 真 代	64,000	卒業・修了祝賀会写真代他
通 信 費	29,880	加入案内送料 (研究科新入生) (4,900円) 未加入者へ加入案内送料 (学部4年) (23,580円) 卒業・修了祝賀会写真送料他 (1,400円)
会 議 費	600	お茶代
事 務 費	120,000	名簿整理及び会費払込案内ほか事務処理謝金
消 耗 品 費	20,619	会費払込取扱票 (9,450円) ドッジファイル, メンディングテープ他 (11,169円)
郵便振替払込料	13,120	会費払込手数料 (117人)
予 備 費	510,000	会費二重納入者分返還 (10,000円) 弘前大学創立60周年記念事業寄附金 (500,000円)
次年度繰越金	7,602,459	
計	9,214,698	

平成22年度 弘前大学理工学部同樹会予算書

平成22年4月1日

◎収入の部

(円)

項 目	金 額	摘 要
前年度繰越金	7,602,459	
会 費	3,640,000	正会員 364人 ×@ 10,000円 学部 1年 314人 " 2年 10人 " 3年 10人 " 4年 30人
計	11,242,459	

◎支出の部

(円)

項目	金額	摘要
弘前大学同窓会費	240,000	
同樹会報作成費	255,000	1,500部×@170円
卒業・修了祝賀会費	300,000	120人×@2,500円
写真代	84,000	卒業・修了者祝賀会記念写真 160人×@525円
通信費	40,000	加入案内送料(研究科新入生) 70人×@90円 加入案内送料(学部学生4年) 250人×@120円 卒業・修了者祝賀会記念写真送料他 3,700円
会議費	10,000	
事務費	120,000	名簿整理及び会費払込案内ほか事務処理謝金
消耗品費	20,000	ワープロラベル用紙, P P C用紙他
郵便振替払込料	18,000	会費払込手数料 150人×@120円
予備費	10,155,459	次年度以降経費引当金を含む
計	11,242,459	

編集後記

平成十七年度より幹事(会計担当)を努めております一線で、振り返りますと、平成十二年度に、従前の文理学部理学科・理学部・理学研究科の同窓会と新設された理工学部に対する同窓会を束ねる形で、理工学部同樹会が発足してのち、しばらくして幹事の任を拝命したわけですが、この平成二十二年年度の年度末、同樹会発足後十年目の節目の年を終え、次の節目へと向かう折り返しとなり、この節目まで本会に対し、ご協力を賜りました皆様に感謝申し上げますとともに、今後とも本会へのご理解、ご協力をお願い申し上げます。

今回ご寄稿いただいた沖繩科 学技術研究機構の佐藤博士には、お忙しい中ありがとうございます。理学部の卒業生として初の栄えある名譽に、同樹会としても心よりお祝い申し上げます。

さて、年度末の節目といえは、学部卒業生、大学院修士が巣立つ時期であり、新社会人として大きく羽ばたいて欲しいと願う時節でございますが、羽ばたく先の社会の情勢が就職氷河期と称される厳しい様子であると

耳にします。しかし一方で、氷河期ということではなく、求職者数と求人数の関係では後者の数が多く、労働力需給の量的ミスマッチということも耳にします。そのミスマッチの多くは、中小企業においてのようです。私見にて恐縮ですが、「中小」企業という呼称がよろしくないように感じています。コンパクトさやコストの面では、「小」が求められている昨今であるにも関わらず、古来からの「大」は優れているの意という暗黙の認識が根底にあり、企業という語に「中小」という冠がついた際の語感が、求職側の興味を削いでいるように感じています。

「専門分野特化型企業」という呼称にしては如何か、と思う今日この頃です。同樹会会員各位のお立場におきまして、このようなミスマッチの現状を感じているようなことがございましたら、是非とも同樹会に情報をお寄せいただくと共に、理工学部、理工学研究科の学生への企業PRの一つの窓口として、同樹会を捉えていただければ幸いです。

最後に様々な面にてご協力頂きました、理工学研究科事務長始め事務職員の方々に、この場をお借りして感謝申し上げます。

事務局

弘前大学大学院理工学研究科 一條 健 司
住所：〒036-8561
弘前市文京町三
電話：0172-39-3660
E-mail : ken@eit.hirosaki-u.ac.jp
URL: http://www.st.hirosaki-u.ac.jp/~doju/



監査	幹事	副会長	会長
須藤 荒木	一條 松野	三浦 賢二	千葉 信行
勝 宏	健 徹		
弘 孝	司 也		

役員一覧

